

## Neuroretinitis: Review of the Literature and New Observations

Valerie Purvin, MD, Seema Sundaram, MD, Aki Kawasaki, MD

**Journal of Neuro-Ophthalmology 2011;31:58–68**

### 視神経網膜炎：文献的考察および新しい見方

視神経網膜炎(NR)は視神経乳頭腫脹とそれに伴って形成される星芒状黄斑症を特徴とする炎症性疾患である。視神経乳頭の血管透過性亢進が基礎となる病理の一つと考えられているが発生機序については十分にわかっていない。一部の症例では、視神経乳頭を侵す感染性過程によってNRが生じ、また、ウィルス感染後や自己免疫機序によって起こると考えられる。NRは、特異的な感染性病原体が特定される例、特発性に発症する例、そして、再発性に発症する3つの群(グループ)に分けられる。こうした違いについて明確に区別しないで報告されているものがあり、実際、臨床的な特徴に違いがあるか判然としない。そこで、3つの群に、それぞれを特徴づけるような違いがあるのか、自験例と文献から考察した。

3群に共通する特徴は、年齢、疼痛の欠如、眼底所見である。先行性全身症状は、ねこひっかけ病(CSD)に最もよく認められ、再発群ではまれであった。視野障害の形状や程度は異なり、CSDでは中心視野に限局することが多く、再発例ではより高度に障害された。視力や視野の回復は、再発群では、初回発作後でも、ほとんど認められなかった。通常は3群ともMRIは正常だった。造影MRIによる視神経乳頭に限局した増強効果は3群ともに認められたが、球後視神経の増強効果は再発群に限られていた。CSDを強く示唆する所見は、若年者、先行する全身症状、視力不良であるが相対的瞳孔求心路障害(RAPD)を欠くか小さいことだった。これとは対照的に、全身症状を欠き、中心視野を保存する視野障害で、視力が保存されているにも拘わらず高度なRAPDで視力の回復が不良である場合は、再発性の高い特発性NRを示唆した。

診断と治療にあたっては、こうした特徴に気をつけることが大切である。